

---

# 過去の夢の計画

架空奇人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

過去の夢の計画

### 【NZコード】

N9533Y

### 【作者名】

架空奇人

### 【あらすじ】

過去の夢であつた計画を大人になつてから実行する話。

## 人物紹介

有川竜【俺】 税理士

工藤海斗【工藤】 電気屋

佐藤真【しんちゃん】 ゲーム関係

佐久間孝太【さくちゃん】 ゲーム関係

間藤陸【まつと】 警備員

西山翼【にしづく】 大企業の社長

菊地優【きつぐ】 Tバディレクター

水本空【水本】 大企業の社長

西田晃【西田】 アイデア売り

大倉政【あにい】 フリーター

吉野岳【吉野】 柔道家

高橋元氣【げんちゃん】 警備員

吉澤亮【吉澤】 アイデア売り

林淳希【あつき】 芸能人

大泉光【ズミ】 不明

川崎笑〇

佐々木愛美 ピアニスト

## 人物紹介（後書き）

細かい設定は話の中から読みとつていただければ、と思います。

俺は北海道の中学生だった。入学したのは20年前だつただろうか。男子といつともバカをやつて、始業時間になつても座つてなかつたりするのは良くあつた。だが、不真面目だつた訳ではない。成績は学年で15番目くらい。120人いたから結構いい方だろう。一番の思い出は中2だつた。

一番大きな思い出というようなものではないが、今一番印象に残つてゐるのは毎日の10分休憩での出来事だつた。俺達は一つの小さなイスにいつも大人数で座ろうとする。しかし、イスに座れるのは4人程度、15人なんて到底座れそうにもなかつた。だが、人の上に人が座り、どんなに狭くてもいつも15人で座つていた。当時はたまに何やつてんだろ、と自分でも思うこともあつた。それも今となつてはいい思い出だ。笑い死にの刑などと言つて、とつ捕まえ、イスに座らせて脇をこぢょばしたりして遊んでいたこともあつた。教室中、いや階全体に聞こえるくらいの大きな声で笑い、悲鳴をあげ遊んでいたり、調子に乗りすぎて怒られたこともある。先生に一番きつく怒られたのは、いつだつただろうか。それすらも分からぬ程、何回も怒られていたような気がする。

他人から見ればとてもつまらないこと。それをとても楽しめる俺達は幸せだつたと思う。誰よりも笑い、誰よりも楽しんだ中学校生活だつたような気がする。そんな樂しんだ中学校生活でも喧嘩をしたことも何度もあつた。一番友人を怒らせてしまつた出来事は今でもはつきり覚えている。

恐らく中2の秋だつた気がする。その頃、真は俺達とも仲の良かつた佐々木愛美という女子と付き合つていた。愛美は天然で、元気

すぎるところもあったが、ピュアで可愛かった。そんな二人のこと  
がみんな気になつて、二人が一緒に帰るところを尾行したことがあ  
る。学校をでて、二人は近くの店にはいつていつた。そこで一緒に  
「ご飯を食べるつもりだったのだろう。俺達は一人が並んでいる写真  
を得るため、近寄つて携帯でツーショットを撮つとした。しかし、  
撮る直前に真が立ち上がつた。

「ばれたんじやないか？」

「そんな訳ないだろ。」

と不安になりつつも見ていると、

「トイレしてくるわ。」

と言つて、真がこつちに歩いてきたすぐ近くにいてはバレてしまう  
と思い、席を立ち離れていつた。それでも、すでに遅かつた。店に  
入つた時点で気づいてしまつていたらしい。

「お前らふざけんなよ。」

「ごめん。」

「そんなことして何が楽しいんだよ。」

「俺達の勝手だろ。」

友人の一人がつい口をすべらせてしまつた。

「何が勝手だ！？勝手だといつなら一切迷惑かけねえのかよ？」

「かけてねえだろ。」

一度突つかかつてしまつて、もう引くことはできなかつた。

「かけてねえだと？お前らがいる時点で俺にとつては迷惑なんだよ  
！」

「そんなのしらねえよ。」

「謝れや！して帰れ！」

「分かつた。ごめん。」

謝るタイミングをとえてもらえただけ良かつただろう。でも、何か  
気に入らなかつたらしい。

「なんで、こんなことしたんだよ。」

「それは・・・まあ・・・・・。」

吉野は答えようとしたが、いい言い訳がでこなかつたらしい。

「早く言えや！」

「分かつたよ。言つてやるよ。俺あいつのこと好きなんだよ。」

「・・・」

「笑えばいいさ。俺はもうしらねえ。」

「ごめんな。」その後は自然と仲直りしていった。

やりすぎてしまつたりすることもあった。しかし、遊びの中で喧嘩になることはそうそうなかつた。これもいいとこだつたと思う。いつの間にか先生にも怒られなくなる、そんな日々が3年の時にやつてきていた。

冬のある日、他クラスの友人も誘い、15人で休み時間外にでた。午前中は雨で雪が溶け、グラウンドは水溜まりだらけ。そんなことにせずに遊んでいた。転んだら最悪だよな。そんなことを話しながら、ぶつかりあつた。今考えると、この遠慮のない行動が失敗だつた。吉澤はぶつられたまま転び、水溜まりに倒れ込んだ。被害者となつた吉澤、加害者となつてしまつた淳希。被害者と加害者になつた二人以外の人はその場に点が見えていたかもしれない。何も言えぬまま見ると、被害者はビショビショ。下着まですべて濡れていたので、学校に入つてジャージになる。怒られるだらうな、と思っている俺達。一人、吉澤が怒つているだらうなと思つてゐる淳希。しかし、先生に説明してみると、一切怒られず、笑われるだけだつた。吉澤も怒つてゐる様子はなく、全く氣にしていないようにも見えた。こんな事件も楽しい思い出になつてゐるのが不思議だつた。そんな楽しい日々もあつという間に過ぎ、卒業式を向かえた。2、3時間静かにしてゐるのは辛いものだつたのだが、終わつた後に遊びことを考えていれば、案外時間が短く感じた。終わつた後、遊びにラウンドワンに行つた。男子だけでも40人はいたのだろうか。それでも、15人でずっと固まつて、遊び続けた。これが中学生

最後の思い出だった。

## 過去（後書き）

読んでくださった方ありがとうございます。  
是非、アドバイスお願いします。  
今後に活かしたいと思います。

そして、同窓会の日がきた。会場に行くとたくさん同級生がいて、その中に特に仲の良かつた友人が13人いたが残りの1人はいなかつた。話を聞くと、仕事場が海外で戻つてくることができなかつたそうだ。思い出の15人ではないのが残念だが、思い出の14人で思い出話や仕事の話をした。にしつペがあの有名企業の社長だつたというのは驚きだつた。話をしていくうちに昔の話を思い出しきつた。

「そういえば、昔考へてたゲーム作つてみた?」冗談で聞いたその言葉がすべての引き金となつた。

中2の冬、席替えで仲の良かつた男子で同じクラスだつた8人の内、7人がすぐ近くになつた。授業中、離れてしまつた一人は急に真面目になつたのだが、俺達は予想通りうるさくなつてしまつた。そして、ある日、授業中にゲームの話が始つた。

「ねえ、クールオブビューティーっていうゲームやりたくない?」突然始まるさくちゃんの話。

「何それ。」

ゲームの好きな水本はすぐに食いついた。

「暑いところでどれだけクールに踊れるかっていうゲーム。」

「クソゲーだな。」

吉澤が言つた。

「あれじゃね? むさ苦しい中年太りの親父が主人公とか。」

「体力制とかもいいかもな。」

「それいいな。クールに踊る程体力減つて、激しく踊つたら回復とか。」

「激熱ドリンク飲んで、回復もいいかもな。」

「Wi-Fiで通信対戦とかは?」

「ゲーム機絞られるから一機で多人数対戦の方がいいだろ。」

「そうだな。他に何かステージ作るとができるんじゃね。」

「クソゲーだけど、ちょっとやりてえ~」

「でもゲーム機どーすんの。」

「PSPとか?」

「いや、クールゲーム会社作って活気的なゲーム機開発だろ。」

「売り始めたら速攻バカ売れだろうな。」

「最終的には大会だろ。」

「日本大会?」

「世界大会に決まってるだろ。」

「絶対すぐープレイヤーでてくんだろうな。」

「そういうえば、昔考えてたゲーム作ってみた?」

「そんな話もあつたかもなあ。」「なつかしいなあ。」

「あれがあつたら本当にやつてみたいんだけどな。」

「俺も今でもそう思つてるよ。」

「まじか。俺もだ。」

「売つたら人気でるんじゃね?」

「お前、昔のまんまだな。」

「どういうこと?」

「そんな簡単に売れる訳ねえだろ?」

「そうそう。」

「でもせ、作るだけ作ってみたくね?」

「俺達で作れるようなもんじゃねえだろ。なあしんちゃん。」

「何だよ。作れとでも言つてるのか?」

「そういうことだよ。」

「いいだろ。一人で作ろうぜ。」

「さくちゃんまで何言つてんだよ。いくらかかるか分かるだろ。」

「資金はこしつペ持ちで。」

「ちよつ・・・。」

「それならいいな。一緒に作るか。」「よっしゃ、やつたるー。」

「とにかく、昔言つてたレジャーパークもやつてみねえ？」

「これも中2の冬の出来事。

「レジャーパーク作りてえ。」

「こきなりなんだ。」

「いや、楽しい遊び場ほしーなと思つて。」

「俺、理想のレジャーパークある。」

「まじか。気になる。」

「あんね、普段はそいらのレジャーパークよりつまらんただの場所なんだけど一週間に一回イベントあつてな、朝から夜まで好きなだけ3000円で遊べんの。」

「そういう場所いいな。」

「3000円つていう安さがまたいいよな。」

「イベントも毎週違うとかな。」

「逃走中みたいなできたらな~って。」

「やりたいな。宝探しとかも男の夢だよな。」

「そうだな。一日中宝を求めて大冒険。死ぬまでにやりたいことの一つだろ。」

「死ぬまでのこともう考えてんのかよ。」

「中はせ、自然ゾーンと建物ゾーンに分けたら面白くなじそうじやないね？」

「建物ゾーンは一個に全部つながつてるけど、グネグネな道とか。」

「自然ゾーンが、擬似砂漠とか、山に洞窟とか楽しそうじゃない？」

「そうこうのいいな。逃走中だつたら、逃げ場と隠れ場多くて楽しそう。」

「宝探しするにしても、古い建物で地図を見つけて、地図の暗号を解きながら、いろんな自然を冒険するのが理想だしな。」

「いろんなポイントで試練作つたりマジ楽しそうだな。」「イベント何回行つても楽しそうだな。」

「普段も客が来るような場所にしたら、大ヒットだろ。」「普段は常連客の謎解きパークーとか開いてみたいな。」

「いいねえ。」「誰か作れよつ。」

「とこりうださ、昔言つてたレジャーパークもやつてみねえ？」「授業中に話したつて言つてたやつか？」

「そうだよ。」「でも、資産が足りないだろ。」「そうだよな。」「そうだよな。」「俺達もいつまでもガキでいられないよな。」「大金が絡んでくると遊びではできないよな。」「そんな楽しめる程の土地手に入れようとしたら、数十億かかるんじゃねえか？」

「そうだよな。」「でもさ、この14人で協力して、レジャーパークも作るつぜ！…」「これだけは冗談では進められないよな。」「でもさ、楽しめる場所つて大事じやん。」「それもそうだけど…。」「やつてみても、凄い大変だと思つよ。資金が足りないし、住んでるところ全然違うから構想の段階で疲れきつちやつよ。」「でもな～…。」「じゃあみんな俺の家来いよ。一人なのに家無駄にデカいしよ。」「軽く自慢か～～？」「いいだろう。」「本当に作るかはもつと時間かけて相談しよつ。」「それは分かつてる。」

同窓会で他にもたくさん人がいたが、俺達14人は子供の頃と変わ

らず、盛り上がっていた。ノリが変わっていると思われる」とは多いが、これが俺達だ。結果的に同窓会終了後全員で西浦の家に集まり、ゲームとレジャーパークを作るための相談をすることになった。

「誰の14人でまた楽しめるな！」

そこに仲の良かつた女子が話に入ってきた。

「アーティザン」の言葉が、アーティストの言葉をも超越する、アーティスティックな表現を示す言葉だ。

「昔みたいにまた樂しめるんだからな。」「私も一緒にやりたいな。教室でレジャーパー

楽しそうだつて思つてたんだ。」

「歌うよナゾ」

あ  
・  
・  
・  
。  
「

「じゃあ私もいれて！」

作るのはためだけと云ふ言葉をしたくこそ云ふにあつては、たゞにがたい

「それでもいいかな。」

愛美と笑は人とは違う目線で物事を見ていたりして、アイデアに長けてるところあります、結果16人で作る二七二四本の本。

同窓会が終わり、すでに夜12時と遅かつたためにしつべの家には男子だけで行った。社長とは知つていたので、家は大きいのだろうな、と想像はしていたが、そこまで大きい訳ではなく俺の家と同じくらいだ。みんなでそつちに入ろうとすると、

「そこ俺の実験室だから入るな。」

と、とめられてしまった。話を聞けば、様々な素材や形状でどれが一番適切かを確かめるためだけに作られた建物だそうだ。そこには最近一ヶ月は入っていないそうだが、大事な資料などもたまっているらしく入られたくないそうだ。

そこから少し進むと今度は本当に大きい城のような家がてきた。自分の家の5倍はあるだろう。3階建てだつたが、土地が広くこれこそ金持ちというような家だつた。そこに入るといくつもの部屋があり、その中のひとつで話し合いが始まった。

「まず部屋は一人で一つになるかもしないけどそれでも大丈夫か？」

「一人で一つ！？」

「だめだつたか？」

「いや。部屋7個もあるのか。」

「リビングとかプールとかあるから実際はもつと多いけどな。」

「冗談の自慢でも心折れるからやめてくれ。」

自慢は冗談でしていたが、部屋の数などはまったく冗談ではなく、30個の部屋とプール、大浴場のような風呂場に映画を見るだけのための部屋など想像できない程の数の部屋があるらしい。

「でさ、ゲームとレジャーパークどうすんだ。」

「ゲームは作るっていう前提で話を進めてもいいのか？」

「それはな。」

「まあ、まずレジャーパーク作るのか？」

「俺は作りたいな。みんな家族いないんだからさ。」

「ううう、大きな計画もいいんじやない？」

「失敗して、借金まみれになつたらどうすんだよ。」

「待つてる人もいないし、海外に逃げようよ。」

「冗談で話してんじやねえよ。」

「冗談じやないって。」

「でも、俺達いなくなつても家族に迷惑が、とかないからなあ。」

「なんか悲しくなつてきた。」

「おつしや、楽しんでやる。」

「作るかつ。」

「やつてみるべ。」

その後もたくさんさんの話をし、まずゲームの製作からかかることにした。その間残りのメンバーは資産稼ぎ。それが一番いい流れな気もしなくはなかつた。そして、一人の女子はゲームが完成するまでは家に呼ばないことにした。

翌日からゲームの計画が始まった。

「ゲームの名前はクールオブビューーティー。」

「これは変えないで作ろう。」

「懐かしい名前だな。」

「ネーミングセンスない氣もするけどな。」

「思い出の作品みたいでいいじやねえか。」

「ゲーム内容も大体は昔考えたやつでいいんじやないか？」

「クソゲーのまま売り出すのか。」

「操作方法を考えて画期的なゲームにすればいいと思つよ。」

「それもそうか。」

「それは後でじっくり考えよ。」

「そうするか。じゃあまず、キャラはどうする?」

「初期は昔考えたやつで、ステージクリアしていく間に仲間が増え  
て、選択可能とかがいいんじゃないかな?」

「むず苦しいおっせんで始まるのかー。」

「変わったゲームだな。」

「変わりすぎだろ。」

「まあそれがいいんだろうな。」

「ゲーム内アイテムは?」

「激熱ドリンクとかクールじゃなくなる回復アイテムとHアコンみ  
たいな涼しくなるアイテムもいいんじゃない?」

「それでいいか。細かいアイテムはまた考えよ。」

「ステージは暑いとこ?」

「少しずつ暑くしていって、だんだんクールに踊りにくくなるとか。」

「それ良さそうだな。」

「次のステージに進む条件は?」

「ダンスにポイント付くようにして、一定ポイント超えるダンスを  
したら次のステージ行けばいいんじゃないかな?」

「なんとなく見えてきたな。作つてつて悩むところできたら、また  
相談するわ。」

「OK。」

「大人になつたから、といつのとゲーム作りは遊びだから、といつ  
考へで少しつづきとうに考へてゐる気がするが、本来もつとじっくり  
悩まないといけないような気もする。」

「ちょっと待て。ゲーム機の相談忘れたままじゃないか?」

「重要なこと忘れてたな。」

「俺の理想としては手足頭胴にセンサーつけて自分が動いたのに反応するとか楽しそうだと思うけどな。」「動くのが苦手な人はできないってか?」

「そうだなあ。コントローラー式とセンサー式両方作るってのどうだ。」

「作れなくもないけど、価格が高くなるよな。」

「昔言つてた大会やるんなら幅広い人に楽しんでもらいたいから価格も高すぎると困るよな。」

「そんなに売れないと困るよな。」

「本体とコントローラーで売り出して、別売りでセンサーでいいんじゃないか?」

「センサーと本体はどうやってつなぐんだ? ?」

「それなら俺達でなんとか動きを電気信号にして、キャラクターにも同じ動きさせるように作つてみるよ。」

「俺もやんのか。」

「お前もゲーム作つてんだろ。頑張れよ。」

さくちゃんとしんちゃんが仕切つていつたゲームの相談はある程度決まってきた。そこで一度ゲーム作りを始めたことにした。実際にゲームを作るのはさくちゃんとしんちゃんなので、残りの12人は何もすることがなかつた。しかし、初日ということで役割分担などをする必要があるので、今日は全員仕事を休んだ。そして、明日からあにい以外の11人は仕事に戻り、フリーターのあにいは洗濯、掃除、炊事、買物をすべてすることになつた。

しんちゃんとさくちゃんがゲームを作り進めている間、俺は有川事務所で税理士としての仕事をすすめていた。ゲームのことが頭から消えなかつたが、信用をなくすような真似をするわけにはいかない

いのでしつかりと仕事をやつていた。昼の休憩もなく、ぶつ通しで午後5時くらいまで働いた時、ふとあることの確認をしていないことを思い出した。それは総資産だ。これが確かになつていなければ、どこまで大きなことができるかも分からぬ。ちなみに俺はとくと2億程度貯まっていた。この10年間この個人事務所をやつてきて、ここ5年は休みなどほとんどなく、働いてきた。そのお陰もあって、俺の年収は3000万。今はようやく信頼もついてきて、大きな仕事ももらえるようになつてきた。それでも、生活費は月5万円でおさえるようにしている。それでようやくたまつた貯金をこういつよつに使えるのは嬉しいことだと思う。

一日働き終え、家に帰った後全員で資産の確認をすることにした。にしつへは社長なだけあって、貯金の額は数十億。水本も社長らしくじく水本と同じ程度。吉澤、西田、きつぐ、淳希も俺より少し多くたまっていた。残りの5人も俺よりは少し少ないものも5000万以上は貯金がたまっていた。しかし、フリーターだったあにだけは貯金額が5万と少しという程度で少し足をひつぱつているような気もしたが、それは仕方がなかつた。そして14人の合計金額は70億程度になつていた。

「これなら十分色々と作れそうじゃないか？」

「土地買つたり、建物たてたり、宣伝したり、それに維持費とかもかかるだろうし、税金もたくさんとられるだろうからなあ・・・。」

「これで足りないとか一大事だろ。」

「こうなりやゲームを本気で作るしかないんじゃないか？」

「それなんだけどよ・・・。」

「ん?どうした。」

「一ヶ月ぐらいはかかると思うよ。」

「まじかよ。」

「まあそんぐらいかかると思つてたよ。」

俺達の夢の計画はまだまだ完結しそうにはなかつた。しかし、これは長くなる」とは分かっていた。これからも気長にやってこい!。

## 完成

それから2ヶ月という充実した日々があつと、いつ間に過ぎた。

「そういえば、ゲーム作りだいぶ進んだ。」

「あとどんくらいだ？」

「カセットの方はもう完成したんだけど、まだバグとかが見つかるかもしれないからなんともいえないな。」

「ゲーム機はどんくらい進んだ？」

「それは後でさくちゃんに聞いてみてくれ。」

「分かった。」

「じゃあ続きをやってくるわ。」

「頑張れ。」

そして、 shinちゃんが部屋に入ったのとそれ違つように今度はさくちゃんが部屋から出でてきた。一人とも同じような疲れきつた顔をしている。夜は本当に寝ているのだろうが、少し心配になる。

「さくちゃん、ゲーム機の方進んでる？」

「前作つたことあるやつ参考にして作つたんだけど、センサーが難しいな。」

「やつぱりか。」

「ああ。できたんだけど、コードをつけると動きにくいうことが分かつてなあ。」

「一応できたのか。さすがだな。」

「まあな。頑張つたんだよ。」

褒められて、少し照れているさくちゃん。努力を認めてもらえて嬉しかつたみたいだ。

「それで、ワイヤレスにするのか？」

「それも考えたんだけど、近くで同時プレイできなくなるんだよな。

「なんでだ?」

「たまに信号が混ざっちゃうことがあるんだ。」

「チャンネルみたいな感じできないのか?」「どうこうことだ?」

「A、B、Cを選べるようにして違うのだったたら混ざらないとかよ。」

「それをやっても技術のせいかたまに混ざっちゃうって話だ。」

「そうだったのか。ごめん。」

「まあ分からぬよな。」

「詳しくないからな。」

「ちなみに今は外付けのカメラを作つてみてる。」

「そうか。それで完全に認識できるようになつたらセンサーの代わりで完成つてことか?」

「それはないな。プレイしてみたら、バグとかがいっぱい見つかるからまだ2週間はかかる。」

「そつか。まあ頑張れ。」

さくちゃんはさつき見たのと同じような姿で部屋に戻つていった。

そこから2週間。ついにゲームは完成した。しかし、二人で隅々の細かいバグまで処理したそうだが、まだ残っているかもしれないということで今夜はクールオブビューーティー大会が始まった。最初は言い出しつべの俺がやることになつた。操作方法は当然外付けのカメラ、素晴らしいダンスを披露してやる。曲が流れ始めた。最初のステージだからか、場所は普通の部屋。音楽も激しいような曲調ではなかつた。自分が思い付く限りのダンスを繰り広げた。そして、点数発表。ジャカジャカジャカジャカジャンッ！表記ものは50／100という数字。それと一緒に短い文が添えられていた。

『あなたのダンスは独特でした。動きが固いのが残念です。』

「50点のダンス!」と、みんなからバカにされてしまった。それよりも表記されるのが、点数だけでないということに驚いた。そして、次はあにいの番だ。俺がクリア出来なかつたステージを再チャレンジすることになつた。踊りが始つた。あにいはダンサー志望だつただけもあつて、なめらかでどこか優雅な雰囲気を出しながら、最後まで踊り続けた。

『98／100・すばらしく。』のゲームの王者かもしません。』

みんなは俺の時とは全然違ひ、やはり「すげえ。」などと声が上がつていた。

「とにかくしゃん、、コメントは何通りくらいあるの?』

俺も気になつていたことを先に淳希が質問してくれた。

「200通りくらいあつて、その中から大体の動きと点数からコメントを選ぶようになつてる。』

「へ~。200か~。ちなみに一番高いコメントは?』

「教えねえ~よ。お前らが出したらその時に言つてやるよ。』

「いいじゃねーかよ。まあそれも楽しいか。』

その後もゲームを1時間くらいやり続けた。そしてもうやめようと言つていた最後の一回。不可解な動きをしていたまつどがついて100点をだした。

「おお~! すげえ。』

「このコメントが一番上か?出してやつたぞ。』

まつとが勝ち誇る。

「残念ながら、これは一番田だぞ。仕方ないから教えるが、一番は『もうこのゲームやめてくれつ。』なんだよ。」「くそつ。満点でもだめだったか。」

「100点の上に120点つてのが一個あるんだよ。」

1時間やり終えて、結局バグは見つかることがなかつた。強いていうなら、まつとのダンスが100点を叩き出してしまつたということだねつ。

「せういえばや、パッケージ一人で決めてみたんだけじ、これでもいいかな。」

「作つてる一人とは言え、みんなに相談しろよ。」

「ああそれはいいけど、このパッケージだと印象に残らないんじやないか？」

「そりかなー。」

「背景の写真はいいとして、文字が目立たないよな。」

「てか、どうせならもつと燃えそくなくらい熱い写真にしようよ。」

「クールに踊るつて意味で涼しそうな写真選んだんだけどな。」

「じゃあそのままの写真で文字を燃えたかる炎みたいな感じにすればいいんじやね。」

「そうするか。」

「それよつと、値段どうするの？」

「制作費的には、本体とコントローラーとカセットで2万5000円、カメラは3000円つてことがいいと思つた。」

「まあ俺達には良く分からないし、別にいいんじやねーか？」

「じゃあこの価格で売り出すよ。」

「てか初回限定セットで4点で2万5000円を50個売らない?」

結果的に最初は4点2万円で30個売り出すことになった。それからは本体とカセット+コントローラー+カメラで2万5千円。コントローラーとカメラを別で買うなら3000円とこいつことになつた。

価格が決まり、いよいよ各店に並べてもらえるようにお願いしにいく日がきた。事前に連絡はしていたが、実際に来てもらつてから決めると言われ、今日は分担して5店舗を回る。俺はきっと一人で実物を持って、店に行つた。

「こんにちわー。以前電話した者ですが。」

「ああ。あの人ね。」

「ゲームが完成したんで持つてきました。」

「それなんだけどね、店長に相談したら知らない会社のゲームはいらないと言われてね。」

「無理になつたつてことですか?」

「ごめんね~。でもそちらの会社名前広まつてないでしょ? なんて言つの?」

会社名・・・そんなもの決まっていなかつた。すんなり受け取つて並べてくれると少し思つてしまつていたことからの油断の表れだつただろうか。

「ク・・クールゲーム会社です!」

……。やつてしまつた。昔みんなで考えていたゲーム会社をできとつに言つてしまつた。何たるミスだろ?。

「やうかい。やつぱり聞いたことないねえ。」「はい・・・。では、さよなら。」

ゲームを並べてもらえない上に、仮想のゲーム会社名を名乗ってしまったなんて最悪の失敗だ、そう思っていた。

「「めん。ゲーム置いてもらえないかった。」

置いてもらえないかったのは俺だけじゃなかつたんだ、そう思つと心が楽になつたような気がした。

「実は俺もなんだ。」

「俺らもだよ。」

「俺らも。」

結果的にみんな置いてもらえないからしい。しかし、俺には仮想のゲーム会社を名乗るといつもつ一つのミスがあった。

「あのさ・・・、実は・・・。」

「といえば、ゲーム会社勝手にクールゲーム会社にしちやつた。」

俺が話そうとしたその時だつた。田川君、ミスの少ない工藤も俺と同じ失態を犯していた。しかし、誰も文句は言わず、そのまま『クールゲーム会社』となつていつた。自分の中だけでの問題は解決したのだが、ゲームを売るという問題はまったく解決していなかつた。どの店舗でも取り扱つてもらえずどうするんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9533y/>

---

過去の夢の計画

2011年12月1日19時48分発行